

スペイン産の粘土を使った染色コース



本場大島紬に認定された染色新技法の製品写真:



メイン講師:
鹿大名誉教授 瀬戸房子先生



瀬戸房子
教育学部教授

試作した土染織物の性能評価は鹿大教育学部で行った。「この土で染めることによって、防しわ性が向上し、接触時の熱流束量が小さくなり、静電気の発生が低く、吸水と蒸発が速くなることが分かりました。泥大島と同様に着心地がよく、裾さばきが良いという特徴を有しながら、やさしい色の温かみのある風合いを持つ美しい着姿の着物となるこ

生地機能性の
高いことも明らかに

とが期待できると思います」と瀬戸教授は語る。
現在、この新しい染色技術による染色糸と従来の方法による染色糸を組み合わせて大島紬の定義に沿った着尺地を製作し、大島紬としての検査に合格するに至っている。

- ①募集人員 小学生20名（小4年～6年生）
場所 毎回 婦人会館にて講義＋染色実験を行います
- ②1回当たり2時間×3回連続コース 土曜日 午後 13:30－15:30
手提げバッグ(小物入れ)の白生地を各自で自由に染めて完成させます
保護者参加も可能とします。その場合2コのバッグを別々に染めて持ち帰り出来ます
- ③指導体制 講師＋現役高校生スタッフ予定＋事務局
- ④コース参加費 1人¥5,000（保護者参加も可）⇒ 3回連続参加可能な児童が対象です

染色チーム専任指導員

瀬戸房子 鹿大名 名誉教授



大島紬は、鹿児島島の自然環境とそこに暮らす人々の知恵と工夫によって生み出され、発展してきた織物といえます。住んでいる土地に自生する草木を利用して着るものに色を施していた古の時代に、奄美大島の人々は農作業着の田んぼに浸かった部分が黒くなって色落ちしにくくなるという現象に気づき、それが今日まで受け継がれている大島紬の染めの技法の原点となっています。奄美大島の泥田の土は、尖った角がなく、粒径 $2\mu\text{m}$ 以下と細かく、二価鉄イオンを多く含んでいます。そのため、糸を傷めることなく布と色素の仲立ちをして結合させると共に土そのものが物理的に吸着して、日光や洗たくに強い染色物を得ることができます。糸や布の染色には身近な植物が用いられますが、大島紬の染色に用いられる特徴的な植物は奄美大島に自生するバラ科の常緑低木の車輪梅です。タンニンを含む車輪梅の煮出し液で数回染められた糸は泥田に浸けられます。その一連の業をさらに数回以上繰り返して黒くしなやかになった糸で織られたものが泥大島と呼ばれる大島紬です。その他に、染料として藍や植物染料、合成染料も用いられています。柄には、蘇鉄やハブ、亀甲などの自然から図案化した伝統的な文様の他に人物や山水画のような複雑なものもあります。柄を表現するために、染まっていない部分のある緋(かすり)糸を織糸にします。染色は、まず、機(はた)で本絹糸とガス糸という綿糸とを織ります。それを染めて綿糸を切り解くと、綿糸と交差していた部分は染らず、絹糸には緋模様ができます。縦糸と横糸の緋柄を合わせながら織ることによって、複雑な柄の織物が完成します。このような工程を踏む大島紬は「二度織りの織物」と言われます。大島紬の種類には、大別すると泥大島、草木染大島、藍大島、色大島、白大島などがあります。仕上げられた織物は検査され、鹿児島市では旗印、奄美大島では地球印の証紙によって、その品質が保証されています。